# こまざわ経済通信

発行
駒澤大学経済学部
同窓会
〒154-8525
東京都世田谷区駒沢
1－23－1

## 卒業おめでとう！

### 経済学部との絆を大切に
### 卒業したら経済学部同窓会に入会しよう

大場やすのぶ会長

ご卒業おめでとうございます。

皆さんは経済学部の授業やゼミで多くの知識や教養を学んだと思います。自分は意識していなくても、それは皆さんの考え方や意思決定や生活スタイルや生き方の土台となるものです。

大学で得たものは知識や教養だけではありません。学ぶ心、考える方法も社会人として生きていくうえで大きな力になるでしょう。

先生からだけでなく、友人や先輩や後輩から教えられ、学んだことも多かったと思います。

大学での人間関係のなかで育まれた思いやりや助け合いの気持ちも大切な財産です。

豊かなものを与えてくれた大学生活、いつまでも先生や友人との絆を大切に、そしてバトンを後輩へつないでください。

卒業したら同窓会員となって、駒澤大学経済学部の発展に力を貸してください。

## 新しい時代に向かう経済学部

平成２７年３月には３名の先生が定年退職を迎えられます。新年度には４名の先生が就任し、学部と大学院の新執行体制も発足します。経済学部は教授陣の急速な世代交代と教育改革によって新しい時代に向かって大きく変貌しようとしています。

**定年退職（平成２７年３月）**

大石雄爾　教授（経済理論：勤続４１年）　大吹勝男　教授（流通経済論：勤続４０年）
小杉修二　教授（中国経済論：勤続３３年）

**新任（平成２７年４月）**

井上智洋　専任講師（マクロ経済学）　増田幹人　専任講師（人口論）　福島浩治　専任講師（国際経済論）
深見泰孝　専任講師（証券市場論）

**経済学部長（平成２７年４月）**

姉歯　暁　教授（消費経済論）

**大学院委員長（平成２７年４月）**

経済学研究科：荒木勝啓　教授（応用ミクロ経済学）
商学研究科：　森田佳宏　教授（会計監査論）

# 第７回経済学部同窓会総会開催される
# 懇親パーティも盛大に

平成２６年１１月１日、第７回経済学部同窓会総会が開催されました。

大場やすのぶ会長の挨拶にはじまり、事業報告、監査報告、事業計画、予算案、役員選出、新役員挨拶と議事が進行し、会員からの意見や要望も出され、活発な議論が交わされました。来賓の経済学部部長小栗崇資先生からは大学や経済学部の現状について説明があり、出席者は大学をとりまく環境の変化や経済学部の将来に思いをめぐらせ、熱心に耳を傾けていました。総会終了後、恒例の出席者全員による自己紹介や近況報告があり、和気あいあいのうちに会を終えました。雨天にもかかわらず前回総会よりも出席者は増加し、名誉教授の参加もあり、充実した総会になりました。

総会終了後はホームカミングデーの懇親会に合流しました。「商経学部・経済学部卒業生のコーナー」には卒業生が集まり、ビールやワインのグラスを片手に懐かしい友人との歓談の輪がひろがりました。

毎年開催のホームカミングデーで、経済学部同窓会は会員だけでなく、商経学部・経済学部のすべての卒業生の絆を強めるための活動をしています。オープンな組織ですので、お誘いあわせのうえ是非ご参加ください。

次回総会は３年後の平成２９年に開催されます。さらに盛大な集まりとなるよう役員一同努力します。会員の皆さまにもいっそうのお力添えをお願い致します。

小栗　崇資　経済部長

# 卒業生シリーズ

## 学生時代の思い出

高野　秀夫（駒澤大学名誉教授）
昭和４１年　商経学部卒業

今年は、戦後７０年の節目の年です。私は、戦後、東京のがらくたの中で育ち、駒澤大学商経学部の入学は、昭和３７年です。当時は学生服に学帽のスタイルで、背広の学生や女子学生は、かなり目立ち、好奇な眼差しの対象です。日本は、所得倍増計画、集団就職、大量生産の高度経済成長期に入り、国中が、力道山のプロレス、東海道新幹線、東京オリンピック、ビートルズ来日で沸き、「長嶋、大鵬、卵焼き」の標語が飛び交い、子供たちも大人も、とにかく強いものに憧れ、ド根性もの、ゴジラの娯楽番組がはやった時代です。

大学は、キンケイ（ケインズの近代経済学）と、私には一時、自国が社会主義になるのではないかと思ったほどのマルケイ（マルクスの経済学）です。世界は、ベトナム戦争、中国文化大革命、資本主義と共産・社会主義に別れ、ケネディ大統領の下でキューバ危機になり、ベルリンに東西ドイツの壁が現れます。日本は、自民党が一党独裁の５５年体制に入り、社会党は第一次６０年安保で巻き返しを図ります。本学も昭和３９年、講堂、体育館を完成し、北海道教養部を増設し、文化系総合大学へと大きく変貌して行く時代です。

４年次に商経学部が経済学部に改組になり、私は就職せず人生の方向を変え、その後、本学の教員としての英文学の道を歩むことになります。しかし英文学も「物」と「金」と「心」の関係をしっかり捉えないと説得力のある文章は書けません。その意味で、東洋の精神文化の「心」を説く本学において学んだ、神学者でもある「経済学の父」アダム・スミス（１７２３－１７９０）の『国富論』（An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations：英国だけでなく他国の幸福も視野に入れた他者への心の共感；Sympathy）の産業革命時代精神は、私の宝物です。

私は、今後とも、人生を大きく左右する青春時代の激動期を共に過ごした同窓との語らいが醸し出す至福のひと時を大切にして生きて行きたいと思っています。

# ゼミ紹介

## 鄭ゼミ

鄭　章　淵教授（アジア経済論　担当）

鄭（チョン）ゼミでは、現代東アジア経済研究をテーマに掲げて勉強しています。ここでいう東アジアとは、東北アジアと東南アジアを合わせた地域を指しています。世界銀行によって「東アジアの奇跡」と称賛された経済発展がなぜ起こったのか、とくに日本経済との関係を意識しながらさまざまな文献を読でいるのが通常のゼミ活動になります。また、夏休みには演習Ⅰ・Ⅱの合同ゼミ合宿を実施するとともに、秋には「日本におけるアジア探訪」と称して、横浜の中華街や新大久保のコリアンタウン界隈を訪れる課外授業も行っています。ゼミメンバーには留学生も多く、ゼミ自体が一つの異文化相互理解の場となっています。

卒業生の中には、三菱東京ＵＦＪ銀行やＳＭＢＣ日興証券をはじめとする金融機関、阪急百貨店などの小売業界、ＨＩＳといった旅行業界に就職した学生のほか、広く中国や韓国など海外で活躍する卒業生（日本人卒業生）もいます。卒業生の同窓会はとくに組織していませんが、卒業生とは比較的コンタクトを取る機会が多く、年に一度は卒業生がゼミを訪ねてきて就職のことなど後輩ゼミ生に話をする機会も設けています。また、海外にいる卒業生については、こちらが当該国に赴いた際にはできるだけ会うように心掛けています。ゼミ教員としては、彼らの異国での苦労に思いを馳せると心配の種が尽きないところですが、元気で頑張っている姿に接するたびにこちらも大いに励まされている次第です。

最後に、研究分野は、韓国経済をはじめとするアジアＮＩＥｓ（新興工業経済地域）研究です。最近の研究業績には以下の文献があります。

〔単著〕

・鄭章淵著『韓国財閥史の研究』日本経済評論社、２００７年

・鄭章淵「韓国における経済民主化の射程」『経済学論集』第４６巻２号、２０１４年

〔共著〕

・和田春樹ほか編『岩波講座 東アジア近現代通史』第９巻、岩波書店、２０１１年

・朝鮮史研究会編『朝鮮史研究入門』名古屋大学出版会、２０１１年

### 経済学部同窓会の永続のために　会費納入と寄付金のお願い

経済学部同窓会は平成５年に設立され、任意加入の組織ながら多数の卒業生の参加を得て、２２年間着実な歩みを続けてまいりました。

同窓会は卒業生の絆を強める活動だけでなく、経済学部の教育を背後から支え、学部の発展に貢献してまいりました。現在、経済学部同窓会は学内最大の学部同窓会としての地位を築いております。これもひとえに皆様のご協力の結果と、厚く御礼申しあげます。

しかしながら一方では、時の推移とともに、会員の高齢化と入会者の減少によって、財政危機が深刻化していることはすでにお知らせしたところです。

同窓会の存続には、なによりも財政の安定が必要です。昨年も窮状をご説明し、会費納入および寄付金をお願いしましたところ、会費納入者が増加しただけでなく、多数の会員が寄付金をお寄せ下さいました。皆さまの母校や経済学部に寄せる熱い思いに感動し、また感謝いたします。

皆さまのご支援により財政はやや持ち直したとはいえ、依然として組織的永続が保証される状態にはございません。たび重なるお願いで大変心苦しいことでございますが、今年度も会費（年２，０００円）納入にご協力いただきますとともに、篤志の方は賛助の寄付金をお寄せいただければ幸甚に存じます。

寄付金は１口１，０００円で何口でも申し受けます。ご協力のほど心よりお願い申しあげます。

経済学部の発展とともに、経済学部同窓会が未来永劫存続しますように、皆様のお力添えをお願い申しあげます。

駒澤大学経済学部同窓会長　大場やすのぶ

# ゼミ紹介

## 渡邉ゼミ

渡邉　恵一教授（日本経済史　担当）

このゼミでは、日本の経済・経営・産業を、歴史的視点から研究しています。概説書や専門書のリポート＆ディスカッションという基本的な学習を進める一方、学生自身がアイディアを持ち寄って決めた独自の研究テーマにも取り組んでいます。その研究成果を発表する場となっているのが、毎年、他大学の日本経済史・日本経営史ゼミと合同で開催しているインターゼミです。

２０１４年度のインターゼミは、駒澤大学が当番校を担当しました。年末の１２月２０日、明治大学、立教大学、高千穂大学の教員と学生を１号館４０２教場に迎え、終日にわたって各ゼミの研究発表と質疑応答が行われました。当ゼミが選んだ今年度のテーマは、「高度経済成長期の『衣・食・住』」です。巷間言われるような華やかな変化ではなく、当時の人々の生活に密接した緩やかな、しかし後の時代からみれば決定的な変化を追ってみようというのがその趣旨です。「衣・食・住」に対応させる形で準備した報告は、「消費者嗜好の多様化とアパレル産業の発展」、「『外食』の変遷と展望」、「高度成長期における住環境と家族の変遷－耐久消費財の普及率と関連づけて－」の３本でした。

研究をまとめる過程では、もちろん一通りの助言や指導をしていますが、インターゼミ当日は、もはや手を差し伸べることができません。他大学の教員からも、容赦のない質問が出されます。私の力不足を痛感させられる場面もありますが、その一方で、当ゼミの学生が当意即妙の受け応えをしたり、普段はお目にかかれない（？）鋭い質問を投げかけたりすることもあります。箱庭のようなキャンパスにいる「駒大生」ではなく、「大学生」としての彼ら、彼女らが姿をあらわす瞬間です。

夕方からは学食を貸し切り、立食パーティー形式の懇親会で盛り上がりました。経済学部で歴史を学ぶゼミは、どの大学でも少数派ですが、こうした交流を通じて学生は自分たちが決して「特殊なゼミ」ではなかったことに気づきます。インターゼミへの参加は、学生にとっても教員にとっても決して楽なことではありませんが、研究の面白さや奥深さを肌で感じることのできる貴重な機会となっています。

# 社会科学論に因んで――フリートリヒ・リストの最期――

大　石　　雄　爾　教授

経済学部における私の主な担当科目は経済理論（マルクス経済学）だった。それに加え、全学共通科目の社会科学論をも長年担当してきている。全学の学生諸君が熱心に耳を傾けてくれるとあって、毎回、教場に向かうのが楽しい授業の１つであった。

さて、社会科学論の授業では、社会認識の理論を世に提示した思想家を取り上げ、その時代背景や理論内容について概説した。アダム・スミス、マルクスはいうまでもなく、その主著が『政治経済学の国民的体系』であるドイツのフリートリヒ・リストをも取り上げて、彼の理論とその活動について講義したものである。

リストが活躍したのは１９世紀の前半で、彼の問題意識は、イギリスに遅れて商工業（資本主義）段階に達しようとするドイツがいかにして生産力を高め、イギリスに追いつきうるかということだった。つまり、発展途上国が先進国に潰されずに発展するための経済構造とその諸条件を解明するということである。彼は多数の小邦に分かれたドイツに関税同盟を創設すべく尽力し、統一的な国民市場の形成を理論的に説くとともに、流通の発達に不可欠なドイツの鉄道開設にも貢献した。だが、それだけではない。リストはすでにこの頃、急速な経済発展を始めたアメリカと広大な国土を持ったロシアの資本主義化の動きを重要視し、イギリスを含むヨーロッパ諸国がこの二大国の間に埋没しないためには経済共同体の形成が必要なのだと説いていた。そこには、２０世紀後半のＥＥＣ実現からＥＵ結成につながるような、ヨーロッパの共同化を推進するという構想の萌芽が見てとれる。

このようなヨーロッパ発展への尽力にも関わらず、リストの最期は多くの人々に憐憫の情を催させるものだった。仕事の面でも家庭生活においても破綻した彼は、精神的疲弊からの回復を希って南国イタリアへと旅立った。だが、ドイツへの帰途に立ち寄ったオーストリアの町クフシュタインで１８４６年１１月末、雪深い町はずれの山裾にて拳銃により自ら命を絶ったのである。キリスト教の教義では、自殺者は神に背いたものとされ教会での葬儀は行われず、また町の墓地への埋葬も叶わぬという。ところが、非運の経済学者に同情した町の人々は、医者・警官や教会の牧師も巻き込んだ１つの救済策にたどり着いた。それは医者が彼の死を精神病によるものと診断し、警官が死因を病気と認め、それを受けて牧師は教会で葬儀を行うことに同意し、役人も亡骸(なきがら)を町の墓地に葬ることを許可するというものだった。私はリストの死後１５０年目に当たる１９９６年、クフシュタインの町と彼の墓を訪ねてみた。色とりどりの花に囲まれ、レリーフ上のリストは当時のＥＵ成立とユーロ導入への動きを喜んでいるかのように見えた。不運な経済学者を救おうとする住民の心根に改めて感銘を受けながら、私はこの町を後にした。

（平成２７年１月２８日脱稿）

ウィスキー蒸留所を見学したさいの大石先生

# 研究室訪問シリーズ

明石　英人
（専任講師、２０１４年就任、
社会経済学　担当）

２０１４年度より経済学部現代応用経済学科に着任した明石英人と申します。担当科目の「社会経済学」は、Political Economyの訳語ですが、経済を社会全体との関わりから考察するという意味合いをもっています。前期の講義では、ケネー、スミス、リカード、マルサス、マルクスの基本的な考え方を概観しました。途中でＮＰＯ法人からゲストをお招きして、ブラック企業問題について講演していただいたこともあります。後期は、エコロジー・マルクス経済学の理論をふまえたうえで、ウィリアム・カップの「社会的費用」論などに取り組んでいます。ゼミはまだ方向性を模索中ですが、現代的な貧困・格差問題に関する文献の輪読を中心とし、夏休みの合宿では、仙台の仮設住宅地でボランティア活動を行いました。現実の社会問題を理解するためには、現場で暮らす人々と実際に交流することが不可欠というコンセプトのもとで、ゼミ活動を継続していきたいと考えています。

現在の個人研究テーマは、マルクス『資本論』の草稿研究で、とりわけエコロジー問題への彼のアプローチ法に注目しています。彼は、素材（物質）の次元と価値の次元の矛盾・対立という観点から、人間の心身の破壊、自然環境の破壊について分析しました。それは同時に、未来社会建設のためのヒントを与えてくれるものでもあります。彼の草稿は、ドイツ語がメインですが、英語やフランス語なども入りまじり、読むのに大変骨が折れます。しかし、従来の通俗的なマルクス解釈とは非常に異なる理論的地平を見いだすことができます。その現代的ポテンシャルは計り知れないほど大きく、世界中で着々とマルクスの草稿・抜粋ノート研究が進められているのです。マルクス研究の意義とそれを若い世代に伝えていく責任を実感しながら、日々を過ごしています。今後ともよろしくお願い申し上げます。

# 同窓会後援ソフトボール大会

第２４回ゼミ対抗ソフトボール大会は、雨が今にも降りそうな悪天候のもと、１０月１５日午前９時より開催されました。天候が悪いため肌寒く、前日の雨の影響によりグランドコンディションは最悪でしたが、どのゼミも優勝を目指し、早めに試合に向けてウォーミングアップをするなど、大会の熱は冷めませんでした。

しかし皆の願いもむなしく昼過ぎには雨が降り始め、その勢いは増すばかりでした。雨の中でも試合続行を願うゼミが多々ありましたが、午後にはやむを得ず大会は中止となってしまいました。

そこで、残りの対戦は急遽ジャンケン大会に変更になりました。各ゼミ代表を１名選出し、優勝を目指し、一発勝負の負けられない戦いが開幕しました。その結果、優勝は友松ゼミ、準優勝は松本ゼミ、３位は北口ゼミと吉田（真）ゼミ、敢闘賞は瀬戸岡ゼミとなりました。

今年のソフトボール大会は途中からジャンケン大会になりましたが、試合に劣らず大いに盛り上がりました。普段は接する機会の少ない他ゼミと交流でき、皆で喜び、また悔しがり、とても楽しいイベントとなりました。

（北口ゼミ　３年ゼミ長　遠藤晴義）